

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22530707

研究課題名(和文) 発達障害児の児童 - 思春期発達移行における心理社会的適応支援のあり方に関する研究

研究課題名(英文) A survey for transitional process from childhood to adolescent of children with developmental handicaps

研究代表者

遠矢 浩一 (TOYA, Koichi)

九州大学・人間・環境学研究科(研究院)・教授

研究者番号：50242467

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、発達障害児の児童期、思春期から青年期に至る過程における心理学的支援の在り方について、集団・個別心理療法、リハビリテーションプログラムに参加経験のある児童および母親を対象にし、調査・面接研究を実施した。その結果、集団心理療法参加によって、児童の発達経過に伴い、行動面・認知面、心理的安定性の改善が見られる一方で、終結後のフォローアップの必要性が示唆された。また、祖父母、きょうだいを含む家族間関係性支援の重要性も示された。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the effective strategies to support developmental-transitional process of children with developmental handicaps from childhood to adolescent. As results of the survey and interview, although improvement of behavioral problems, cognitive weakness and mental stability after group psychological therapy and individual therapy were found, also the necessity of follow-up after the therapies and familial supports were indicated.

研究分野：障害児心理学

キーワード：発達障害 移行 心理療法 集団 家族

1. 研究開始当初の背景

子どもの発達において児童・思春期における心理社会的適応状態を保つことは、その後の健全な精神発達および心理的安定のために極めて重要である。母親を主とする重要な他者との心理的な絆を継続的かつ安定的に保ち、心理的に受容される経験を重ね、ゆるやかな心理的自立を図ることは、やがて訪れる思春期という重要な発達移行期において、自己を確立しつつ、他者との適正な心理的距離を保ちながら、社会的生活を送るために不可欠である。こうした発達早期の愛着的経験を適正に保つことができない場合、反応性愛着障害や脱抑制性愛着障害とよばれるような心理的不適応状態に陥ることが明らかとなっている (Levy & Orlans, 1998)。近年、発達障害が注目されるようになり、自閉症・注意欠陥多動性障害・学習障害は特にその支援の必要性が指摘されるようになった。こうした障害は反応性の精神障害とは異なり、明らかに生得的な要因から生起するものである。そうした発達障害児にとっても、環境因による精神的不健康状態は必然的に生起する。とりわけ、学童期から思春期の、通常であれば、友人関係を様々に経験し、同性・異性の友人から受容される経験を重ね、仲間とともに行動する共同行為体験を欠いたまま成長することは、生得的な発達障害に加え、うつ、不安障害などの精神疾患を“二次障害”の形で抱えることにつながる。筆者は、これまで、発達障害児の対人関係形成支援のあり方について検討を加えてきた。その結果、自閉症や ADHD をもつ児童にとって、大人の支援のもとで友人関係を発達段階にふさわしい遊びの中で経験すること、とりわけ、知的発達水準・生活年齢・行動と思考の柔軟性、多動性・衝動性、注意の転導性、社会的志向性といった様々な視点から、こどもの状態にあわせて工夫された集団的支援が有効であること、こうした集団支援プログラムに参加する発達障害児の多くが行動面に関して母親を主とする大人の評価よりも、より高い水準で友人関係を欲し、自ら、同世代の仲間たちと“上手に関わる”努力をし、現在よりもっと良い友人関係を保っていききたいと希求していることが明らかとなった。しかしながら、こうした研究の中で残された発達障害児支援における新たな課題がある。それは、小学校中高学年から中学・高校段階における発達障害児の精神的健康を保つための支援のあり方に関する検討である。この時期は、発達に障害を有するか否かにかかわらず、極めて重要な発達の移行期にあたる。本研究は、学校・家庭・社会と発達障害児が関わる様々な生活環境において、思春期を中心とする発達の移行期にある発達障害児に対してどのような支援が必要なのか、その関連要因について包括的に検討することを目的とする。

2. 研究の目的

発達障害児の社会生活スキル発達支援の問題は、かつての ICIDH の障害概念がそうであったように、本人の“能力の障害”として、発達障害児個人の問題としてとらえられ、結果的に、机上の学習型でどういった場面でどのような行動をとるべきかと言った社会的行動方略についての“知識”ベースでの指導が、特に学校場面で行われることが少なくなかった。しかしながら、机上学習での知識は実際の社会生活での応用力に乏しいことが明らかとなり、いわゆる、語用論的アプローチと呼ばれる実用型スキルの体験的学習のあり方の効果が示されるようになった (長崎・小野里, 1996)。こうした体験型支援方略は、発達障害児の長期的な心理的“健康”の視点から考えたとき極めて重要である。発達障害児をまずは第一義的に「子ども」ととらえ、子どもに必要な体験の場を環境条件として用意し、そこへの主体的参加を促しながら子ども自身に発達障害ゆえの困難に対峙するための生活技術や方略を身につけさせることを促すからである。そうした体験型支援の場では、子どもは、単なる社会的スキルや対人関係能力といった視点からではなく、障害児である以前に、一人の子どもとして他児と主体的に関わり、何よりもそこで発達段階に相応の“楽しめる”体験を重ね、その自然な対人交流の中で生活年齢および精神的発達水準に適した対人的受容・被受容体験を重ねることが可能と考えられる。しかしながら、これまでの研究では、そうした発達障害児のための心理的支援環境の重要性が指摘されてはきたものの、どのような支援形態や支援プログラムが有効であるのか、支援内容自体の長所・短所といった細かな検討はなされていない。本研究はそうした視点から、特に、思春期発達障害児の発達過程における心理社会的適応を保つために必要な体験型心理支援プログラムのあり方について実践的に検討を加えること目的とした。その効果を継続的に追跡・評価する。

3. 研究方法

(1) 筆者が実施する発達障害児のための集団心理療法に継続的に参加した児童およびその保護者に対し、種々の心理アセスメントを継続的に実施しながら、集団心理療法参加による体験的变化についてインタビューおよび調査研究を実施する。

(2) 発達障害児の保護者に対して面接調査、および質問紙調査を実施することを通して、児の発達プロセスについての母親の意識および、母親自身の精神的、身体的健康状況について明らかにする。

4. 研究成果

(1) 発達障害児集団心理療法参加者の予後

調査研究

(1)過去に集団心理療法に参加経験のある対象児/者に対して追跡調査を実施し、現在の有人関係と社会的スキル・適応状況/精神的な健康度、保護者による子どもの社会的能力、および、問題行動との関連を検討した。その結果、友人関係認識尺度とBDI抑鬱検査の関連において、友人関係認識高群が友人関係認識低群に対し、得点が有意に高いこと、友人関係認識尺度とKISS社会的スキル尺度との関連において、友人関係認識高群が友人関係認識低群に対し得点が有意に低いこと、友人関係認識尺度とCBCL子どもの行動チェックリストとの関連において「思考の問題」で友人関係認識高群が友人関係認識低群に対し、得点が有意に高いことが示された。すなわち、集団心理療法においていったんは、友人関係にポジティブな印象を持ったとしても、その後の友人関係について否定的な印象を有した場合は精神的健康度が低くなる傾向が示唆された。

(2)対人関係に困難を有する児童の行動特徴と保護者の精神的健康度の関連に関する調査研究

集団心理療法への参加経験のある児童とその保護者を対象として、保護者の精神的健康度と、集団心理療法終了後の児童の行動特徴との関係性について検討した。保護者において、子どもの障害特徴が強く表れていると感じる場合、あるいは、子どもが精神的に不安定であると感じる保護者においては、自身の精神的不安定傾向が高まることが示された。

(3)発達障害児の集団心理療法参加時と集団心理療法終了後の行動特徴の変化過程についての検討

児童期、思春期の発達障害児に対する養育が後の対人関係上の対処行動に及ぼす影響について検討した。同年齢他児との関わりを経験させる集団心理療法を通して、対人スキルや心理的交流体験を得た発達障害児に対してCBCL子どもの行動チェックリストによる行動評価を行った。さらに、集団心理療法終了後、同様にCBCLによる評価を実施し、両者の得点を比較した。その結果、集団心理療法に参加することを通して、攻撃的行動によらずとも、他者に自分の気持ちを伝える手段を持つことができるようになる可能性が示された。また、社会性や注意のコントロール上の問題についても集団参加の意義が示唆された。一方で、社会性の問題を抱える子どもの場合、「引きこもり」、「不安抑鬱」、「非行行動」などの問題を抱えており、他者とのコミュニケーションに持続的に困難を抱えていることも示され、継続的な支援の在り方の検討の必要性が示された。

(4)発達障害児と保護者への個別心理療法の在り方に関する調査研究

個別心理療法に過去、参加した経験のある児童と保護者を対象に質問紙調査を実施し、

個別面接終了後における適応状況に検討した。質問紙調査の結果、個別心理療法によって生活上の安心感を提供できていたことが示された一方、心理療法終了後、子どもや保護者は、日常での劣等感や不安を持続的に感じていることが明らかとなり、子どもの適応状況と保護者の精神的健康は強く関連していることが示された。このことから、個別心理療法終了後においても、クライアントや保護者に対して持続的なフォローアップ支援が必要であることが指摘された。

(5)発達障害児の行動特徴と認知的特徴の関連性に関する研究

集団心理療法に持続的に参加した発達障害児を対象として、CBCL及びWISCを用いた縦断的検討を実施した。3年間のCBCL得点の縦断的比較を行った結果、初年度に境界域を越えていた項目において、有意に得点の減少が見られた。また、WISCにおいては、動作性IQ、全検査IQ、さらには、群指数において知覚統合の有意な得点上昇が見られた。他者に受容される体験、自分の気持ちを他者と共有する体験といった対人的な相互交流体験を積ませる集団心理療法は、児童の行動面、認知面の双方において改善をもたらす可能性が示された。

(6)発達障害児の母親が捉える祖父母との関係性に関する研究

障害の有無にかかわらず、母親と祖父母との間のコミュニケーションの有り様は、母親にとっての子育てのし易さという点に於いて、重要な意味を有する。本研究では、発達障害児の母親を対象に、祖父母と子どもの発達障害特有の行動特徴について話すときの難しさに焦点を置いた質問紙調査を実施した。その結果、祖父母、義祖父母といった母親との関係性の違いによって、子どもに関する話題についての“話しやすさ”の点で違いが見られることが示された。また、対人的なトラブル、非対人的なトラブルの内容の違いによって、祖父母への相談行動の差異が認められることが明らかとなった。これらの結果から、母親が両親との関係性の中で発達障害児の子育ての葛藤を抱えている可能性が示唆され、そうした家族間介入の心理学的支援の必要性が考えられた。

(7)発達障害を持つ子どもの対人関係の発達の成長と保護者の認知に関する面接調査

青年期発達障害児の母親を対象に面接調査を実施し、児の幼少期から現在に至るまでの養育経験のプロセスについて詳細な聞き取り調査を実施した。その結果、幼少期から現在に至るまでの児の成長が窺えるが、その成長は正の方向への一方向の発達ではなく、「発達障害特有の難しさの軽減」と「発達段階に応じた新たな難しさの出現」が共存するように発達していることが示された。また、発達障害の診断の前後で見られた過程に特徴が認められた。診断以前は、子どもの対人関係における困難さが顕在化するにつれて、

その行動や特性が障害特性によるものであるとの確信が持てないが故に<子どもの特性理解が不十分であることから生じる困惑・自責>や<他児との比較から生じる焦り、不安>、<戸惑いや心配といった不安>というように、母親は一樣に「不安」の感情が生じていることが示された。しかしながら、診断後、支援や療育で少しずつ人とかわっていくことに対し、「成長の一背景として、療育や集団療法の存在があった」、「支援が行き届いていたおかげで、一度は落ち着いた」、「療育などでの経験がそのような考え方の変化の一因になった」といったように、母親は支援を肯定的に捉えており、支援を積極的に取り入れることによって子どもの対人関係が成長したことが窺われた。

(8)教師の発達障害特性認知と生徒の障害特性認知の関係性に関する調査研究

小中学校における学校教師を対象に、教師自身が認知する発達障害の特性と児童生徒に対して認知する発達障害特性の関係性についてアンケート調査を元に分析を行った。特に注意欠陥多動性障害や学習障害、広汎性発達障害、強迫性障害、気分変調性障害といった様々な精神医学的特徴に焦点を絞り、それらの長を教師が自分自身の性格特性としてどの程度合致すると考えるかによって、現在指導している担任生徒の気になる特性がどのように異なるのかについて検討を行った。その結果、教師自身の発達障害特性の自己認知について多動・不注意傾向因子、強迫性傾向因子、気分の変調性因子が抽出され、とりわけ教師自身が多動・不注意傾向を認知する場合、生徒の不注意特性を強く意識化することが明らかとなった。学校における発達障害児支援においては、それを指導する教師のパーソナリティ特性を踏まえながら、なぜ児童生徒の行動上の問題が教師に焦点化されるのかについて考慮しなければならないことが考察された。

(9)保護者の心理的適応と発達障害児およびそのきょうだい児の適応の関係性に関する研究

保護者の心理的適応と家族関係への認識の在り方が、発達障害児の適応に影響するとの視点から、障害児リハビリテーションプログラムに参加する保護者に対するインタビュー調査を通して、発達障害児およびそのきょうだい児の心理的適応に及ぼす障害同胞ときょうだいの関係性の影響、および、祖父母との関係性の在り方が障害児の母親の心理的適応に及ぼす影響について分析を行った。その結果、きょうだい児は同胞関係の中で様々な葛藤を抱えつつ、それを自己内で調整しながら自信の心理的適応を保っていることが示された。小学生から高校生へと発達するにつれて、「一緒に遊ぶことへの両価的感情」、「面倒を見ることの負担」、「世話をすることへの不満」といったネガティブな感情をきょうだい児が抱えているとする母親の

認識から、障害をもつ同胞に対する「うらやましさをきょうだい児が抱えている」という認識、あるいは、自身が自らの心理的葛藤から適切な距離をとりつつ、障害同胞との関係性を保つようになるという認識へと変化するプロセスが示された。

これらの追跡研究および調査、面接研究を通して、幼児期から青年期に至るプロセスに於いて、対人関係スキルを身につけ、また、受容/共感の体験を共有できる集団心理療法への参加の意義が見いだされると同時に、心理療法終了後の長期的なフォローアップ支援の必要性が示唆された。また、児の養育プロセスに於いて、母親は祖父母を初めとする家族関係に於いて様々な葛藤を抱えつつ、自己の精神的健康を維持しながら児の養育に当たっていることが明らかとなり、専門的支援の立場からは、単なる子どもの養育支援にとどまることなく、養育者の精神的健康の支援に絶えず留意しながら、きょうだいを含む家族関係を視野に入れながら心理的サポートを提供していく必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

1. 藤野正和, 田中沙来人, 遠矢浩一, 針塚進 2012 発達障害児のための集団心理療法「もくもくグループ」の検討 グループ参加者に対する予後調査, 総合臨床心理研究, 4, 1-10. 査読無し
2. 甲斐千晶, 遠矢浩一, 針塚進 2012 対人関係に困難を有する子どもの行動特徴と保護者の精神的健康度に関連について 集団遊戯療法「もくもくグループ」を卒業した児童に関する予後調査より, 総合臨床心理研究, 4, 11-18. 査読無し
3. 本吉菜つみ, 遠矢浩一, 針塚進 2012 対人関係に困難を有する児童・生徒の行動特徴の変化, 総合臨床心理研究, 4, 19-24. 査読無し
4. 小澤永治, 遠矢浩一, 針塚進 2012 発達障害児のための集団心理療法「もくもくグループ」の意義と課題, -卒業生を対象とした知能検査および面接調査から- 総合臨床心理研究, 4, 25-34. 査読無し
5. 小澤永治, 遠矢浩一, 針塚進 2012 発達障害児のための集団心理療法「もくもくグループ」の意義と課題 -卒業生の保護者を対象とした面接調査から-, 総合臨床心理研究, 4, 35-44. 査読無し
6. 島田乃梨子, 遠矢浩一, 針塚進 2012 発達に偏りのある子どもとその保護者への個別心理療法の意義と問題, 総合臨床心理研究, 4, 45-60. 査読無し
7. 田中沙来人, 小澤永治, 吉川桃子, 座間味愛理, 遠矢浩一, 針塚進 2012 発達障害

児のための集団心理療法「もくもくグループ」の検討 -CBCL, WISC による子どもの行動特徴と認知的特徴の縦断的検討-, 総合臨床心理研究, 4, 61-69. 査読無し

8. 吉川桃子, 遠矢浩一, 針塚進 2012 発達障害児のための集団心理療法「もくもくグループ」における「親の会」の意義と課題 卒業生の保護者を対象とした「親の会」での体験に関する追跡調査から, 総合臨床心理研究, 4, 69-76. 査読無し

9. 座間味愛理, 遠矢浩一, 針塚進 2012 発達障害を有する青年の適応と課題 -集団心理療法「もくもくグループ」の終結者を対象とした追跡調査から-, 総合臨床心理研究, 4, 77-86. 査読無し

10. 遠矢浩一, 岩男英美, 大戸彩音 2012 発達障害特性を有する児童の友人関係認識と行動特長の関係性 -友人関係尺度, WISC-, CBCL の分析を通して- リハビリテーション心理学研究, 38, 1-14. 査読あり

〔学会発表〕(計 2 件)

1. 遠矢浩一・岩男英美 2013 発達障害児の母親が捉える祖父母との関係性-発達障害特有の行動特徴について話すときの難しさの視点から- 平成 25 年 8 月 24 日 日本発達障害学会第 48 回研究大会. 早稲田大学国際会議場(東京都)

2. 岩男英美, 遠矢浩一 2013 発達障害児の継続的「親の会」活動における援助者の介入, 平成 25 年 8 月 24 日 日本発達障害学会第 48 回研究大会. 早稲田大学国際会議場(東京都)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者 遠矢 浩一
(TOYA, Koichi)
九州大学・人間環境学研究院・教授

研究者番号: 5 0 2 4 2 4 6 7

(2) 研究分担者 なし
()

研究者番号:

(3) 連携研究者 なし
()

研究者番号: